

6日

「謙遜は榮譽に先立つ」 列王記下15：1～14

## I 導入部

おはようございます。8月の第三日曜日を迎えました。今日も愛する皆さんと共に、会堂に集って、あるいは、ご家庭でのライブ礼拝で礼拝をささげることができますことを心から感謝致します。お盆休みも今日で終わりでしょうか。子どもたちも、後1週間をすれば夏休みが終わり新学期となるのでしょうか。今年の夏は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、いつもとは違う夏、夏休み、お盆休みとなっているように思います。状況や環境は変わりますが、神様の言葉、聖書の言葉は変わりません。今日も、私たちは、聖書の言葉に、神様の言葉に耳を傾け、み言葉を通して養われたい、神様の言葉によって勇気づけられたい、励まされたいと思うのです。

昨日15日は、私たち日本にとっては、終戦記念日、敗戦記念日です。戦争というものが、私たち人間にどれほど大きな痛みや苦しみを与えたのかということを経験した人は、日本人は強く感じているのだと思います。二度と戦争を起こしてはならない。始めてはならないという決意のもと、私たちは平和を求めて生きたいと思えます。真の神様を信じる私たちは、平和の使者として、神様に遣わされていることを重く受け止めて歩みたいと思うのです。

今日は、列王記下15章1節から14節を通して、「謙遜は榮譽に先立つ」という題でお話し致します。

## II 本論部

### 一、神を信じる者の影響は大きい

真の神様を信じるイスラエルの敵国にいたのがアラムの王の軍司令官ナアマンという人物でした。彼は主君に重んじられ、気に入られていたと聖書は語ります。神様はナアマンを用いてアラムに勝利を与えられたと聖書が語っているように、神様に用いられた人物でした。イスラエルの神様を信じて、信仰篤い人物だから用いられたのではありません。その理由はわかりませんが、神様は異邦人ナアマンに目を留め、彼を豊かに用いられたのです。リビングバイブルには、「ナアマンが軍隊を率いて、何度も輝かしい勝利を収めたからです。」とあります。神様はクリスチャンも、そうでない人も用いられるのです。

ナアマンは、アラムの国では尊く用いられ、勇士であり、戦いにおいても勝利することのできた人物、権威があり、財産も多くあったでしょう。何も言うことのない人生を送り、生活をしていました。しかし、聖書は、「重い皮膚病を患っていた。」とあります。イスラエルにおいては、重い皮膚病は、汚れた病いなので、隔離されなければならない病気でした。ですから、家族から引き離され、孤独の生活、治る見込みのない、状態は悪くなる一方で、死を待つばかりの状態です。しかし、アラムでは、隔離するという事はなかったのでしょうか。戦士ですから、鎧を着れば中はわかりません。戦いの時は、勇者として戦っ

でも、鎧を脱げば病人であったのです。そして、日に日に病いは重くなり、死を意識するようになっていたのかも知れません。重い皮膚病を治すためには、アラムの国の神に祈ったでしょう。多くの医者にも診てもらったでしょう。この病に効くという薬は何でも試してみたでしょう。しかし、ナアマンの重い皮膚病を治せるものは何もなかったのです。ナアマンの悩みは妻の悩みでもあり、そして、妻に仕えていた召し使いの悩みでもあったのです。

召し使いの彼女はイスラエルの地から捕虜として、アラムに連れて来られ、ナアマンの妻に仕えていたのです。そして、ナアマンの妻から夫ナアマンの病気の事を知ったのです。彼女は、ナアマンの病の癒しのために日々祈っていたでしょう。祈っていたからこそ、3節にあるように、「御主人様がサマリアの預言者のところにおいでになれば、その重い皮膚病をいやしてもらえるでしょうに。」とナアマンの妻に言ったのです。召し使いの彼女は、癒して下さるイスラエルの神様を知っています。そして、神様の癒しを信じているのです。ですから、重い皮膚病で苦しんでいるナアマンとナアマンの妻に、その解決があることを語ったのです。そして、これが、ナアマン夫妻にとって良き知らせ、福音となったのです。

私たちは、召し使いの彼女と同じように、弱者、小さい者、力のない者です。しかし、彼女がイスラエルの神様が預言者を用いてみ業をなさることを信じていたのです。私たちも、私たちの信じる神様は全能の神様、創造の神様、復活の主、愛の神様であることを知っているのです。罪の中にあって苦しみもがいていた私たちが、イエス・キリスト様の十字架と復活を通して、福音を通して、救われ、罪赦され、永遠の命をいただいた者として、神様を知らない人々、罪を恐れ、死を恐れている人々にこの福音の恵みを伝えたいのです。

## 二、プライドを脱ぎ捨てて

ナアマンの妻は召し使いの言葉、「御主人様がサマリアの預言者のところにおいでになれば、その重い皮膚病をいやしてもらえるでしょうに。」という言葉に希望を持ちました。だから、夫ナアマンに話し、ナアマンも希望を持ったのです。イスラエルから捕虜として連れて来られ、召し使いとして働いている彼女の話をもそんなに簡単に信じるのでしょうか。「溺れる者は藁をもつかむ」とどうすることもできない状況に、「ダメでもともと」と、とにかくトライしてみようと思ったのかも知れません。

あるいは、神様を信じる彼女の仕事ぶりや生活や姿勢に、ナアマン夫妻は、信頼を置いていたのかも知れません。だから、ナアマンの妻は、彼女に夫の重い皮膚病のこと、それで悩んでいることさえも離したのです。相談したのでしょう。それだけの、信頼関係があったのでしょうか。「どうせ、私は捕虜だから」とか、「召し使いだから何もできない」とか、投げやりになって生きていたのではなく、神様を信じて、神様が遣わされた所、アラムでナアマンの妻に仕えるということを忠実に果たしたのだと思います。

召し使いの話をも良き知らせとして受け入れたナアマンは、アラムの王に話し、病いの癒しを期待して、多くのお礼の品を用意して、サマリアへ向かいイスラエルの王へのアラム王の手紙（ナアマンのことをよろしく）と共に行くのです。イスラエルの王は、重い皮膚病を治すことなどできないと衣を裂き嘆きますが、預言者エリシャは、イスラエルの王に、「イスラエルに預言者がいることを知るでしょう。」とナアマンを自分の所へ来させるよう

に願うのでした。イスラエルの召し使いの彼女の語ったことから、ナアマンは神様のみ業へと導かれて行くのです。彼女の語った、たった一言を通して、神様はみ業を行われるのです。

ナアマンは、どのような思いでエリシャの家に来たのでしょうか。今までの苦しみや悲しみが思い出されたでしょう。本当につらかった。死を意識して、絶望し、投げやりにもなった。ただ死を待つだけの希望も、将来もない人生を送って来た。しかし、それも今日で終わり。癒されて、元気になって、以前よりも働き、前向きに生きることができる、と胸を弾ませながらエリシャの家に着したことでしょう。けれども、神様のみ業を経験するためには、彼にはハードルがありました。乗り越えなければならぬ壁があったのです。

10節を見ると、「エリシャは使いの者をやってこう言させた。「ヨルダン川に行って七度身を洗いなさい。そうすれば、あなたの体は元に戻り、清くなります。」」よかった。ここに、ナアマンが長年苦しんだ病気からの癒し、解決があったのです。バンバンザイです。

しかし、11節、12節には、「ナアマンは怒ってそこを去り、こう言った。「彼が自ら出て来て、わたしの前に立ち、彼の神、主の名を呼び、患部の上で手を動かし、皮膚病をいやしてくれるものと思っていた。イスラエルのどの流れの水よりもダマスコの川アバナやパルパルの方が良いではないか。これらの川で洗って清くなれないというのか。」彼は身を翻して、憤慨しながら去って行った。」とあります。ナアマンは、長い間、重い皮膚病で苦しみ、落ち込み、人生をあきらめもした。しかし、召し使いの彼女の言葉に希望を持ち、サマリアまで来た。そして、預言者から重い皮膚病が治る方法を教えてもらった。それなのに、怒って、エリシャの家を後にしたのです。そこに解決があるのに、エリシャの言われる通りにしたら、治るのに、彼は去っていったのです。どうしてでしょうか。彼は、助けを求める重い皮膚病を患う病人ではなく、今だにアラムの軍の司令官勇者ナアマンだったということです。私たちは、神様の前に、自分はどのような者であるのか、正直になりたいと思うのです。

### 三、すぐに従えなくても結果従うのです

ナアマンは、まず、エリシャ自身が出てきて挨拶し、イスラエルの神に願い、ナアマンの身体に触れて癒してくれると自分の癒しの方法を持っていたのです。けれども、顔を出さないし、祈ることもしない。使いをよこしただけ。何と無礼な、という司令官として自分に礼を尽くさないエリシャに怒りました。私たちもそうですけれども、人間というものは、「自分を特別に扱ってほしい」という願望があるものです。病気だからこそ、特別扱いしてほしいのです。苦しいからこそ、他の人よりも特別にしてほしいのです。しかし、アラムの軍司令官だからと言っているので、病気だからというので、苦しんできたからというので、神様は特別扱いしませんでした。エリシャがいつもしているように、召し使いを通して神様の言葉を語ったのです。神様の言葉をストレートに示したのです。

ナアマンは、川のことを問題にします。ヨルダン川はあまりきれいな川ではないようです。ですから、自分の国には、もっときれいな川がある。そこで洗ったほうがいい、と怒るのです。川の良し悪しの問題ではないのです。神様の言葉は、「ヨルダン川に行って七

度身を洗いなさい。」なのです。この言葉に従うかどうかなのです。

ナアマンは、怒り、自分の国へ帰ろうとします。しかし、その時、神様はナアマンの側に癒しのために人を備えられていたのです。13節です。「しかし、彼の家来たちが近づいて来ていさめた。「わが父よ、あの預言者が大変なことをあなたに命じたとしても、あなたはそのとおりにさったにちがいありません。あの預言者は、『身を洗え、そうすれば清くなる』と言っただけではありませんか。」その通りなのです。

ナアマンの家来は、そこに救いがあるのに、癒しがあるのに、それを得ずして帰ろうとするナアマンに、勇気を持って、命を懸けて進言するのです。普段から、ナアマンと家来は何でも言い合える関係にあったのかも知れません。そこに信頼関係があったのでしょうか。

預言者が難しいこと、無理難題を吹っかけても、努力したでしょう。病気が治るならば、何でもしたはずでしょう。預言者は、ヨルダン川で七回身を洗えと言っただけです。それに従えば治るのです。当の本人は、怒り心頭でどうにもなりません、そばにいた第三者は、自分の事ではないので冷静に考えることができたのです。ナアマンは、よく考えると、その通りなので、エリシャの言った通りに、ヨルダン川で7回身を洗い、完全に癒されたのです。神様の言葉に従って行動したら、彼の病いは癒されたのです。ナアマンは、神様の言葉にすぐには従いませんでした。エリシャの態度に一度は、あきらめて帰ろうとした。しかし、家来の言葉に従い、結局は、神様の言葉に従ったのです。すぐには従えなくても、時間がかかっても、とにかく神様の言葉に従って行動することが祝福を受ける道なのです。

ナアマンは、捕虜で、召し使いの彼女の話を受け入れました。信じました。また、家来の言葉を受け入れました。そこに、神様の恵みが与えられたように思うのです。水は高い所から低い所に流れるように、神様の恵みも低い所に流れるのではないのでしょうか。

何よりもイエス様は、天の位に座しておられるはずの神様でしたが、その位を捨て、最も貧しく、最も弱く、最も小さな者になられました。そのイエス様は全人類の罪のために、私たちの罪の身代わりに十字架にかかり、私たちの全ての罪をご自分の身に追われ、裁かれたのです。尊い血を流し、命をささげて下さったのです。死んで葬られましたが、三日目によみがえられ、神様の復活の力を現わされたのです。私たちは、イエス様の十字架と復活のゆえに、罪赦され、魂が救われ、永遠の命、復活の命、天国の望みが与えられたのです。

### Ⅲ結論部

病気が治っても、不幸な人もいるでしょう。それはただ医学的な治療でしかないからだと思います。しかし、神様の癒しは、病気が治るだけではなく、その人の魂が癒され、救われるのです。ナアマンは、重い皮膚病が治っただけではなく、真の神様を知り、信じることができ、アラムの地に帰っても、神様と共に新しい人生を歩むことができたのです。

ナアマンの重い皮膚病の癒しのためには、召し使いの言葉を聞くこと、家来の言葉を聞く必要がありました。つまり謙遜な心が必要だったのです。アラムの王に用いられ、軍の司令官にまでなり、それなりの権力を持った。彼なりの考えや生き方は、今まで通用してきたでしょう。しかし、自分の力ではどうすることもできない重い皮膚病という病いに関しては、どうすることもできなかった。サマリアの預言者の所に行けばという言葉に光を

見出し、期待した。しかし、自分の思い通りの展開でないと腹を立てた。そこに問題がありました。

私たちの信仰生活においても、自分の描いた通りの導きを期待します。願い通りになることを期待しますが、そうならないことも多くあります。癒しの方法や祝福の仕方に自分が中心になってしまうと、思い通りにならない時、怒りやつぶやきが出て来るように思います。

私たちは、自分の考えや自分の方法を優先するのではなくて、神様が導いて下さる方法や形を素直に受けて、神様にお任せしたいと思うのです。そして、私たちの周りに神様が置いて下さる人々、その人々の意見や思いを大切にする者でありたいと思うのです。そして、何があろうとも、示して下さる神様の言葉を大切に、この週も歩みたいと思うのです。